

「岩手の復興と再生に」 オール岩大パワーを

vol.42

<http://www.iwate-u.ac.jp/koho/fukkouletter.shtml> 岩手大学ホームページからご覧いただけます。

小泉進次郎復興大臣政務官との意見交換を実施しました

岩手大学は、6月1日に迎える66回目の開学記念日を前に、小泉進次郎復興大臣政務官を迎えての意見交換会を5月31日に開催しました。

まず第一部として、岩淵明岩手大学長及び理事らが、小泉政務官に対し、これまでの岩手大学の東日本大震災の復興へ向けた取組を説明のうえ意見交換を行い、その後学内の視察として、被災地へも派遣した動物移動診療車等を紹介しました。

第二部としては、小泉政務官と復興支援活動を行っている学生とでタウンミーティングを行い、留学生を含む学生や卒業生ら12名が参加し、三陸復興推進機構「学習支援班」「ボランティア班」「地域コミュニティ再建支援班」での活動概要を紹介しました。

被災地の小学校で学習支援に取り組む学生は、「4年という歳月が

経過したが3月11日になると涙を流すなど、心に深い傷を負っている児童もいる。継続的に訪問し、児童との信頼関係を築きながら支援を続けていく必要を感じる」と感想を述べました。

さらに震災に関する報道や復興支援の予算が減っていることに触れると、小泉政務官から、「今の時代は一人ひとりが誰でもメディアになれる時代。受け身でなくどうやってメディアとして発信できるか考えよう」とのコメントとともに、インターネットを通じて企業等から少額資金を集めるクラウドファンディングを例に挙げ、「予算がないから終わりではなく、知恵を絞ってより出来るようにするという発想を持ち、どうアクションすればよいか考えよう」とのお話がありました。

学生からは、受け身では無く、継続的に活動できるよう色々考えたいと意見が出されました。

最後に、岩淵学長から「予算の事も含め我々が自分たちで何ができるのか考えるということが今日与えられた宿題。みなさん一緒に頑張らしましょう」と総評があり、小泉政務官からは「実際に行動を起こした皆さんを評価している。今後の活動やアイデアに期待しています」と激励の言葉が贈られました。

普段、被災地で個別の復興支援活動を行っている学生達にとって、復興支援活動の意味や意義について考えることの出来た有意義なミーティングとなりました。



学生へアドバイスを
する
小泉政務官



農業教育資料館前で小泉政務官と学生とのミーティング風景

サケの稚魚を放流しました ～キッコーマン食品(株)「みんなで鮭の稚魚を送ろうプロジェクト」～

5月1日、三陸水産研究センターでは、釜石市唐丹町漁協ふ化場からサケの稚魚を片岸川に放流し、稚魚たちは元気に北太平洋に旅立って行きました。

サケは岩手県全体の漁獲高の約20%を占めるとも重要な魚種で、毎年3月から4月に約4億尾の稚魚が沿岸河川から放流されています。しかし、漁獲量は平成8年度の7万トンから年々減少し、震災後は2年連続で1万トンを割り込み、深刻な不漁が続いています。震災前から続くこの不漁の原因について、海洋環境の変化など様々に言われていますが、まだはっきりと分かっていません。

当センターでは、沿岸に回帰してきたサケのDNAを抽出して遺伝子分析を行い、回帰の中心となっている群や環境変化に強いサケを見つけ出し、その資源を増やして漁獲の回復に貢献しようと研究に取り組んでいます。

このような岩手大学のサケ研究を支援するため、キッコーマン食品(株)様は平成26年度から3年間にわたる「鮭の稚魚を送ろうプロジェ

クト」を立ち上げ、この度、同社の「うちのごはん」シリーズ3商品の平成26年9月～11月期の売り上げの一部を本学に寄付して頂きました。この寄附金を活用し、今回、サケの稚魚を放流しました。

様々なご支援をいただき、活動を続けられていることに感謝するとともに、多くのサケが回帰できるよう研究に努めてまいります。



キッコーマン食品(株)様の取組
「みんなで鮭の稚魚を送ろうプロジェクト」



片岸川に放流される稚魚たち

岩手大学三陸復興プロジェクト

岩手大学では岩手大学三陸復興推進機構を設置し、地域の行政や住民、他大学、企業等と連携を図りながら、教職員・学生が一丸となって東日本大震災からの復興に取り組んでいます。今回は、小学生から高齢者まで幅広く教育を通じての支援活動を進めている教育支援部門・学習支援班の活動の一例をご紹介します。

「教育支援部門・学習支援班の活動報告」

岩手大学 教育支援部門 学習支援班
岩木 信喜 (教育学部准教授)

学習支援班の平成25年以降の活動報告をいたします。学習支援班の目的は、広い意味での教育活動、学校を超えた地域の社会的文脈の中での教育を通じて、心の安寧を担保しつつ学びの意欲や自己成長を支え、将来の目標や希望を取り戻したり再発見して生きる力を持続的に発揮できるように援助することです。対象は小学生から高齢者まで広く、釜石市・横手市・大槌町の各教育委員会やNPO法人との連携の下で運営がなされてきました。

たとえば、小・中学生対象の『少年リーダー交流キャンプ研修』では、雪かきボランティア活動にグループワークをとりいれ、ボランティアの認識の深化と釜石の未来のリーダー育成に取り組みました。中・高生対象の『放課後学習支援』では、学習指導を核にしつつも、生徒の居場所と話し相手を提供することによって情緒的安定を重視した学習支援をしました。また、高齢者の『シニアハーツ教室』では、絵画教室や運動会等を通じて知り合いとの相互交流を増やし、心身のバランスに配慮しました。これらは数日から数週間の実施でしたが、他方



大槌小学校 プレハブ校舎の外観



で次に見るような長期的な取り組みもなされています。

大槌小学校(現大槌学園小学部)は、大槌、安渡、赤浜、大槌北の4つの小学校が平成25年4月に統合された児童数約400名の学校で、現在も仮設校舎が利用されています。仮設住宅入居児童は約4割います。学習支援班は、盛岡大学と大槌町教育委員会との協力の下、授業補助、遊び補助、清掃活動を中心に支援を実施しました。支援の開始当初は、授業中のおしゃべりだけでなく、教室の内外を立ち歩く児童がたくさんおり、学生ボランティアは子どもたちの安全確保と授業の担保のためにおおいに活躍しました。平成26年度の参加学生数は延べ745名、教員は同80名(盛岡大学+岩手大学)です。現在もまだ一部に配慮を要する児童がいることもあり、今後も学校側のニーズを細やかにすくいあげながら支援を継続する予定です。

大槌小学校への学習支援の一日の流れ (7時15分ごろ大学出発:18時ごろ大学着)

火曜日	
10:00~10:15	小学校着
10:15~10:30	中休み
10:35~11:20	3校時
11:25~12:10	4校時
12:10~12:30	給食準備
12:30~12:55	給食
12:55~13:20	昼休み
13:25~13:40	清掃
13:45~14:30	5校時
14:30~14:50	帰りの会
15:00頃	小学校発

大船渡エクステンションセンターだより

●にっぽん丸入港歓迎行事が行われました

5月27日、大船渡市で毎年恒例となっている豪華客船の入港歓迎行事が大船渡港野々田ふ頭で行われました。今回寄港したにっぽん丸は5月16日に横浜を出港、ウラジオストクや函館等を經由し5月27日に大船渡港へ寄港、5月29日に名古屋到着までの12泊13日のクルーズです。大船渡市では毎年数回、客船入港の歓迎行事を行い大船渡の観光をアピールしています。歓迎行事では、地元の特産品販売や、ホタテの貝殻を使った置物づくりなどができる体験コーナーのほか、水産のまち大船渡魚グルメ無料試食コーナーも設けフィッシュ&チップスやワカメスープが振る舞われました。アトラクションでは、郷土芸能の綾里大権現舞の披露や地元高校吹奏楽部の演奏があり、終日楽しめる催しでした。夕方の出航では乗船客から紙テープが投げられ、岸壁にいる見送りの人々は船が見えなくなるまで黄色いハンカチを振ってお見送りする感動の光景となりました。



にっぽん丸の船体
総トン数22,472t、全長166.6m、全幅24m、客室数202室、乗客定員524名

●大船渡エクステンションセンターの取り組み

今回紹介する水産加工会社では、震災後の人手不足が課題となっており効率的な生産が出来ずいました。その課題解決のため、生産ラインの一部自動化についての相談を頂き、工学部三好扶准教授との間で「トンネルフリーザー投入工程省力化装置の開発」の共同研究契約を結び、大船渡市

が措置した補助金を活用しながら開発を進めています。

本装置が開発されることにより、素材の前処理工程後からトンネルフリーザー投入までの工程に係わる人員を減らすことが出来ます。具体的には、現在5名必要な作業を2名で行うことが可能になり、また、3名での作業の場合は1名で行えるようになります。これにより余剰人員を前後の工程に振り分けて工程全体の効率化が図られます。本工程の作業は一旦作業を開始すると、腰に負担を掛ける作業姿勢で長時間従事することになりますが、装置を導入することで作業員の肉体的負担を減らすことにもなります。

「キツイ」作業の負担を減らすことにより、従業員の定着率向上や仕事に対する満足度向上に貢献できます。水産加工の現場は3Kと例えられることでもあります。本事業により、省力化や自動化が進み、「キツイ、汚い、危険」のイメージを払拭し、若者に働きたいと思われる環境に近づければ、水産業のみならず地域の活性化に繋がることも期待されます。また、多くの水産加工業者でも同じような課題を抱えていることから、この省力化装置の完成が待たれています。



試作機を加工場に持ち込み可動実験を行った時の様子

今後、様々なプロジェクトが展開される中で、現場窓口としてサポートさせていただきます。

連絡先 大船渡エクステンションセンター

〒022-8501 岩手県大船渡市盛町字宇津野沢15大船渡市商工港湾部内
TEL : 080-5745-9775 E-mail : ofunato@iwate-u.ac.jp